

寺園司著 『文学者と宗教』

江頭, 太助
北九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12139>

出版情報 : 語文研究. 38, pp.52-54, 1975-01-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



紹介

寺園司著『文学者と宗教』

江頭 太助

近年、数多く出版されている近代日本文学の研究書の中で、この本は、稀に見る、寡黙で清楚な論文集である。

この本は、笹洲友一博士の「序」を巻頭に掲げ、寺園氏が昭和二十八年から四十八年にかけて発表されたうちの、主要論文十一編と未発表論文一編が集録され、それを三部に分けて時代に配列してあるので、おのずからユニークな文学史を形成していて興味深い。それぞれのテーマは、樋口一葉、国木田独步、徳富蘆花（二編）、三木露風、山村暮鳥（二編）、八木重吉（未発表）、中原中也、島木健作、太宰治、外村繁など十名の文学者の、主として宗教意識の変遷とその本質を分析し、キリスト教、仏教を問わず、これらの文学者たちの求めた宗教の世界がそれぞれの個性や日本の土着性と有機的に化合して、きわめて独特な展開を示していること、そしてそれが文学の本質と深くかわつてゐることを論証する点で一貫している。

この十二編の論文を通して、二十年以上も持ちつづけて来られた寺園氏の研究態度について、笹洲博士は、「氏の学風には、自ら疑い、自ら解き、以て独り道を楽しむという風情があつて、

けれんやはったり等がないのはもちろんのこと、他を批議し、自家の独創を誇示しようという態度は全く認められない」ばかりでなく、実証的方法に徹した点に「この本の学術的価値を保証するものがある。」と指摘されている。まさしくこの評言にすべてが尽くされているといつてよい。

わたしは、今まで二三の雑誌でこの中の数編はすでに読んでいたが、こうして一本にまとまつてから改めて丹念に読む機会を得て、寺園氏の高邁なお人柄とテーマと研究方法とがかくも不可分に結びついていたのかと、しみじみ感じさせられ、大いに啓発された。また、そこに、寺園氏が文学者に対する強い関心を示されて、この本の標題を「文学者と宗教」とされた理由があつたにちがいない。

寺園氏は、一つのテーマに関して可能な限りの資料を広く渉獵されていることはいふまでもないが、それらの資料を帰納的に整理し、キリスト教または仏教の聖典とのかかわりをつねに照合、吟味しながら、宗教意識の細かな動きにまで深く立ち入つて、文学者のプロトタイプを彫塑するところですべてを言い

きるといふ方法をとっておられる。そこでは資料の一コマ一コマがそのまま寺園氏のことばとして生かされているために、それ以上の仮説、推論、解釈は、贅言を弄ぶにすぎないとも言われるかのように、厳しく拒否されている。だから、完結された文学者像は、宗教意識を中心に彫り起こされているにもかかわらず、宗教談議や説教調の臭みは全く感じられない。それだけに、その文学者像はピュリタニカルとでもいえるほど、実に澄明で、形而上学的な息吹きを生き生きと伝えてくるのである。寺園氏のこのような研究態度を示す例証を挙げておこう。

まず一つには、外村繁が「仮りに宗教とか、思想とかいうものでも、主人に持つてはならない。往年のプロレタリア文学が示したやうに、固定化し、類型化する危険から逃れることができないからである。」と言ったことばをとりあげられて、「これらの言で、いわゆる「宗教文学」を彼がどのように見ていたかがわかるし、宗教に深い係わりを持つ者としての、いわば自戒の言葉としても受け取られるように思う。」と述べられていること。

さらに二つには、太宰治が「聖書を福音的に読んだとは言えない」と結論を引き出されていく過程の中で、太宰が愛好した聖句「己のごとく汝の隣を愛せよ」に触れて、その聖句に対する太宰の考え方に問題があることを指摘された後で、「この第一の誠命（「なんぢ心を尽し、精神を尽し、思を尽して汝の神を愛すべし」）をおろそかにして、第二の方（先に引用した聖句に己の力を尽くそうとしたのが太宰であったが、それではイエスの精神にそわないうことになると思う。自力で文字どおりこの第二の誠命を果そ

うとするなら、誰しも己の限界を思い知る外はない。」と評されていること。

とくにこの二点は、寺園氏がこの本で示されたもつとも注目すべき基本的態度である。

研究者が「主人」もちである場合、その「主人」によって研究者の視線が矯正され、それだけ視野が広げられるのでなければ、決して対象を正しく明視したことはならない。研究者には、対象を正しく深く明視するために、精度の高い澄明な視点がつねに要求されているから、「主人」はその対象を正確に深く切り込めるだけの澄明度を増す働きとして作用するのでなければならぬ。また、太宰に対する評言に見られるように、宗教の本質が認識論的に処理されるものでない限り、人間（自己）中心の自由な解釈は「己の力の限界を思い知」らされることになる。しかも、その宗教と文学は二律背反の關係に立っているから、研究者の立場としては、信仰の有無にかかわらず、「宗教文学」について言及する場合には、絶対者を中心とする世界的機能をもつ多元的意味を絞り、それと同時に文学の自律的機能においてその世界観を客観視するという、きわめて困難な二重の操作が必須の要件となる。もし前者に対する比重が強くなれば、護教文学的「主人」もちの視점에埋没し文学研究の主体性は崩れるだろうし、後者に力点がかかりすぎると、「宗教文学」の核心に何も触ることができなくなつて、宗教は一片の思想に平板化してしまふだろう。その二律背反をきり結び、不安定な均衡を保持させ得るもの、それは研究者の人間洞察の力と実証的態度以外にありえない。寺園氏の研究態度における

厳しさと澄明度は、そこから生まれてきたものではなからうか。これが、この本の基調となつて全編を貫いているのである。わたし自身、文学研究の末席を汚すものとして、寺園氏のこのよな研究態度から示唆されるもの多かつたことを、多くの研究者にも伝えておきたい衝動に駆られている。

「あとがき」によれば、寺園氏は、椎名麟三、遠藤周作、丹羽文雄、武田泰淳にも関心を示され、そこから「大正、明治とさかのぼつてゆけば、問題にすべき文学者はかなりの数に及ぶと思う。そうした人々に当つていった上で、近代日本の文学と宗教との関係の展望を総論の形でまとめることも当然しなければならぬことである。いつかはそれも果したいと思つている。」ということである。わたしは、後学の指標として、その「総論」の出現が一日でも早からんことを、切に期待している。

末尾ながら、この紹介文を草するにあつて、わざわざこの本を贈呈して下さつた寺園氏に、心から感謝申し上げます。

(昭和四十九年四月、笠間書院刊、「笠間選書」8、二八三ページ、定価九〇〇円)

受贈図書(抜刷)

かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかつたかをめぐつて

近畿圏における方言意識の調査

筑前国学者と万葉集―青柳種信―

かめいたかし
阪倉篤義
林田正男